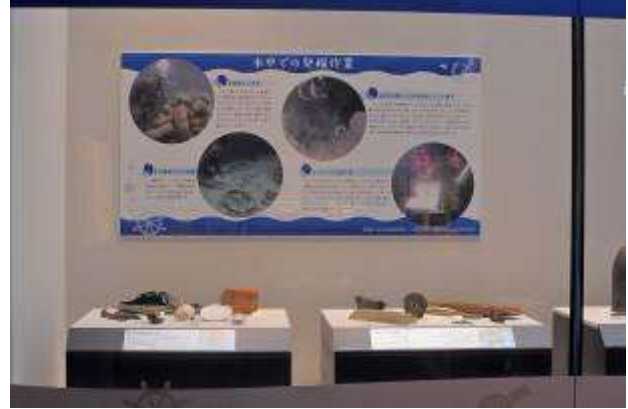


## 九州国立博物館 文化交流展特別展示

### 「水の中からよみがえる歴史—水中考古学最前線—」

開催期間：平成29年7月15日（土）～平成29年9月10日（日）



#### 【企画展の内容・目的】

- 日本の周辺海域に存在する水中遺跡(沈没船など)から発掘された遺物などの展示を通して、海（海運、海事文化）が日本の歴史や文化の発展にとって重要な役割を果たしたことを知ってもらうことを目的に実施した。特に、海を越えた交流(交易・文化交流・戦争など)の歴史を学ぶことに焦点を当てた。
- 付帯事業として、水中カメラマンによるトークショー、子供向けの海のサイエンスショー、水中考古学の研究者による講演会、水中遺跡のVR体験などを実施した。海をフィールドとした仕事の紹介、水中遺跡の調査の手法や遺跡の意義など展示遺物からだけでは示せないことに的を絞り、これらのイベントを実施した。また、多くの人に海の大切さを知ってもらうため、歴史にあまり興味のない大人や子供でも楽しめるよう工夫を凝らした。
- 日本では、馴染みのない海の遺跡について理解を深めてもらい、水中遺跡の保護や海そのものの保護の取り組みを進める機運を高めることを目指した。

# 1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成29年7月15日（土）～平成29年9月10日（日）
- 開催場所：九州国立博物館文化交流展示室 基本展示エリアおよび第9室
- 入場者数： 約85,000人



九州国立博物館 外観



企画展会場 入口



水中遺跡資料コーナー



ミュージアムトークの様子

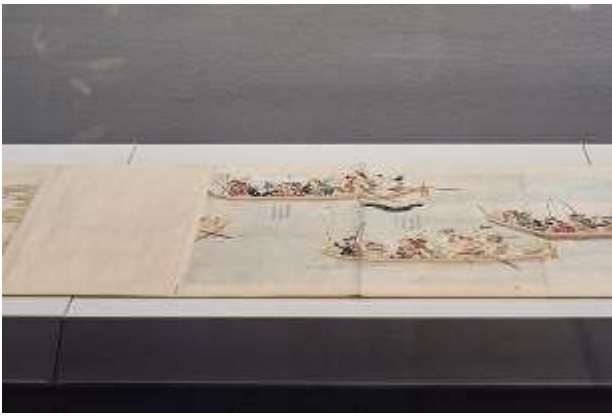
水中遺跡から発見された遺物の展示のほか、パネル展示、トピックコーナー、水中遺跡資料コーナー(水中遺跡へ出かけよう)を作成した。また、一般向けのミュージアムトークや地域の学生向けの解説を展示室で数回行った。

遺物の展示に関して、人と海の関わりの理解と同時に、水中考古学が学問として発展する経緯を示すため、水中考古学の発展の過程(遺跡の発見・発掘された年代)ごとに章として分けて展示した。パネル展示は、子供の夏休みの課題に役立つようイラストを多めに使用し、分かりやすく簡潔な文章とした。遺物の展示とは別にトピックコーナーを設け、有機物の保存について、保存処理、水中ロボットによる探査などを詳しく紹介した。水中遺跡について現地で調べたい人のために水中遺跡資料コーナーを設け、展覧会図録と水中遺跡関連の資料館などのパンフレットを配布した。

普段はあまり見ることのできない水中遺跡に触れ、海を身近に感じ、人と海との長く深い関わりを物的証拠から示すことが出来た。また、海をフィールドとした研究の存在や楽しさについても伝えることができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。





文献史料(蒙古襲来絵詞)の展示



武器・防具類の展示ケース



海の上での生活用品の展示ケース



お守りとして使用された銅銭

## プロローグ 海からよみがえる蒙古襲来

主な資料 長崎県松浦市の鷹島海底遺跡出土遺物：管軍総把印、壺、匙、しらみ取りの櫛、銅銭、てつはう、石弾、冑、剣、碇石など。文献史料：蒙古襲来絵詞、勘仲記（兼仲卿記）

水中遺跡の展示（第1～3章）は、少し奥まった第9室での展示となるため、来館者の目を引くためプロローグは基本展示室（文化交流展示室の中央部分）にて行い、第9室へといざなう形とした。館内および展示室内に比較的目に付く黄色の立て看板を設置し、水中遺跡の展示の宣伝を行った。

蒙古襲来（1281年・弘安の役）の沈没船が発見された日本で最も著名な水中遺跡である長崎県松浦市の鷹島海底遺跡に焦点をあて、実物資料（海底遺跡出土品）と文献史料（蒙古襲来絵詞など）の比較ができるよう工夫して展示した。展示遺物は、戦闘で使用された武器・防具類と船上生活で使用した道具をケース別に展示した。特に生活用品については、美術的価値のある文化財ではなく、一般の兵士が使用した碗、貯蔵用の壺、しらみ取りの櫛など「海の上の生活」に必要な遺物を展示した。銅銭は、「太平通寶」など縁起の良い名前の銭であることから、いわゆるお守りとして所持していたことが考えられる。

安全な航海を望む人々の祈りの形も遺物から読むことができる。ごく一般的な遺物であっても、それを使う人にとっては重要な品となりうることを理解できるよう解説などにも注意を払い展示を構成した。



ごあいさつパネル（4ヶ国語対応）



第1章の展示（一部）



江戸時代に引き揚げられた遺物



研究者のノートの展示

## 第1章 水中に遺跡あり ー水中考古学のあけぼのー

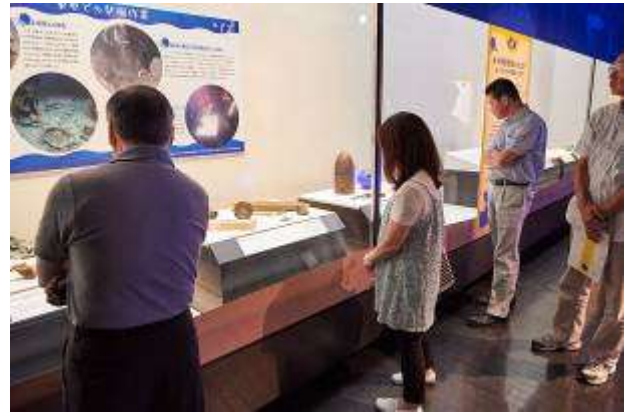
主な資料 和歌山県友ヶ島沖出土青磁碗、染付碗（江戸時代に発見）、長野県諏訪湖遺跡出土石鏃（明治時代に調査）、滋賀県葛籠尾崎湖底遺跡出土縄文土器（大正時代に発見）、小江慶雄直筆ノートなど

第1章では、人々が水中遺跡の存在に気づいてから本格的な調査が始まる前段階までに発見された遺跡について紹介した。江戸時代から陶磁器などが魚網にかかり引き揚げられたり、明治時代にすでに水中遺跡の調査が始まっていたことは、ほとんど知られていない事実であり紹介することができた。水中考古学が学問として発達する以前に見つかった遺物の展示を通して、誰も海中に遺跡があるとは考えなかった時代に人々がどのように未知の水中世界に興味を抱いたのか、また、水中を克服する技術が未熟だった時代に研究者が残したノートなどを通して、水中（海）の研究が発展していくきっかけを作った先駆者の思いを伝える展示とした。海の持つ神秘さや研究対象としての重要性を知る機会とした。

ごあいさつパネルは、日本語の他、英語・中国語・韓国語の4ヶ国語とし、海外からの来館者にも日本の海の研究を知ってもらおうきっかけを作った。また、それぞれの章の始めに案内パネルを配置した。ケースの上には青色を基調としたシール（それぞれの章にゆかりの資料・写真をプリント）、また、ケース下には海底の砂をイメージしたシールを貼った。青い照明とこれらのシールにより、海底の様子を再現し、海そのものが持つ美しさや安らぎなどから海への親しみを表現することができた。



江戸幕府軍艦開陽丸の引き揚げ品



展示を観察する来館者



いろは丸の引き揚げ品



水中遺跡地図

## 第2章 海底発掘調査のはじまり ―水中での学術調査の歴史―

主な資料 開陽丸沈没地点発掘調査出土品大砲の弾、象現器、いろは丸沈没地点発掘調査出土滑車、明かり取りガラス、エルトゥールル号沈没地点発掘調査出土品ボタン、食器類（横浜焼）耐火煉瓦、滋賀県西浜千軒遺跡出土一石五輪塔など

戦後、スキューバ・ダイビングが広まり、水中での活動の幅が広まった。陸上の遺跡発掘調査方法も水中に持ち込まれて水中遺跡の発掘調査が進んだ。第2章では、水中考古学が学問として発達した初期のころの遺跡に焦点をあて、展示を構成した。特に、江戸幕府の軍艦開陽丸の出土品は大砲の弾など軍事品、坂本龍馬のいろは丸は滑車など操船や造船に係わる遺物、トルコの木造蒸気船エルトゥールル号からは交易やお土産として購入された物品や個人の物などを展示した。軍事行動、交易、国際交流など人間の活動の証拠となる遺物を通して当時の歴史と海の上で行なわれた様々な活動について紹介し、文化交流や交易などが海をフィールドに活発に行われていたことを知ってもらうことに努めた。

この章ではパネルを2枚作成した。1枚は、水中遺跡の発掘現場の写真を使い、水中作業の様子を伝えた。もう1枚は、日本の主な水中遺跡地図を展示した。第2章を通して、海で囲まれた日本には多くの水中遺跡があることを知ってもらう機会とし、水中遺跡とくに沈没船を通して日本の歴史に触れ、海運が果たした役割を伝える展示を心がけた。

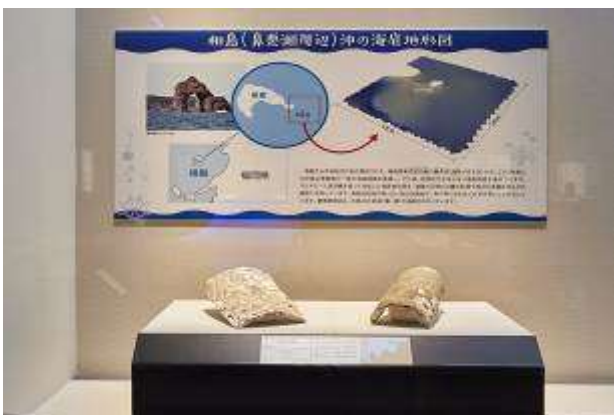




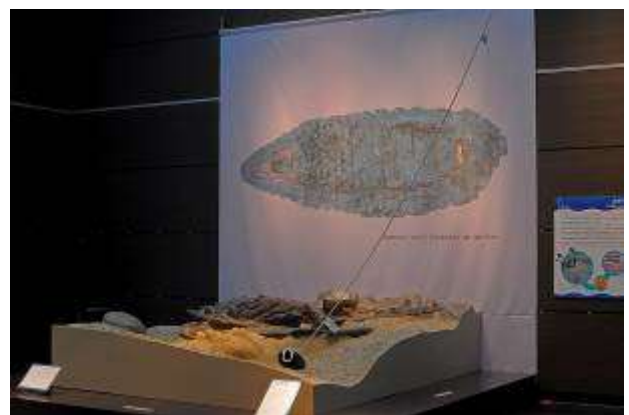
第3章の展示の様子



倉木崎海底遺跡出土の貿易陶磁器



相島海底遺跡の展示



鷹島海底遺跡沈没船ジオラマ

### 第3章 最新の水中考古学調査 —これからの水中考古学—

主な資料 鹿児島県倉木崎海底遺跡出土陶磁器、長崎県山見沖出土陶磁器、前方湾出土陶磁器、福岡県相島沖出土瓦、沖縄県多良間沖出土陶磁器、鷹島海底遺跡2号沈没船遺跡ジオラマなど。

第3章では、最新の水中遺跡の調査事例を中心に紹介した。平安時代の瓦が発見された相島海底遺跡、中世貿易陶磁器が出土する倉木崎海底遺跡や長崎県五島の海底遺跡、また、19世紀のオランダ商船ファン・ボッセ号座礁地点（沖縄県多良間島）の遺跡など様々な水中遺跡からの出土品を並べて展示した。倉木崎海底遺跡からは、サンゴが付着したお皿など「海の雰囲気」を演出した。また、蒙古襲来ゆかりの鷹島海底遺跡の第2号沈没船の3次元計測データをもとに作成した遺跡のジオラマの展示も実施した。

この章では、最新の水中遺跡調査方法を紹介するためパネルを3枚作成した。海底探査や海底ミュージアムの紹介、3次元測量やモデル作成の様子の紹介、そして相島海底遺跡の場所と海底地形図を示したパネルである。これらの展示により、海の中から遺跡を発見し記録して活用する一連の考古学作業を紹介することができた。また、鷹島海底遺跡のジオラマからは、実際の水中遺跡の発掘時の様子を臨場感を持って伝えることができた。九州各地の取り組みを紹介することにより、身近な海の中にも興味をかきたてる水中遺跡が存在し、海は思った以上に身近な存在であることを知ってもらう機会となった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



エントランスの展示（中央がROV）



木材の保存処理の展示

## トピックコーナー

主な資料 東海大学海洋学部水中ロボット（ROV）・ケイちゃん、開陽丸出土の古文書、鷹島海底遺跡出土の炭化米・用途不明木材・鉄銕など。

トピックコーナーでは、水中遺跡に関連したトピック的な展示を実施した。1つは、実際に水中遺跡の探査で使用される水中ロボット(ケイちゃん)を白い台にのせ、ブルーライトを照射して水中の雰囲気表現した。展示室の入り口にダイビング機材を背負ったマネキンを置き、来館者を陸とは違う水中世界へといざなう演出をした。もう1つは、水中での有機物の保存状況が良好であることを示すために古文書(紙)や炭化した穀物を展示した。また、木材の保存処理の実例として、輪切りにして別々の方法で処理をした木材を並べて展示した。写真右側最上段が自然乾燥木(未処理)、下段は処理を行った木材である。このように未処理の遺物は極端に劣化(収縮)するため、水中遺跡からむやみに遺物を引き上げてはいけなことを紹介し、水中遺跡の保護はもちろん、文化や環境・生態等の様々な要素を含む海そのものの保護の必要性を考える機会とした。

### 【来館者の声】

- 遺跡は陸にだけ残っていると思っていたが、実は海にはまだ残っている物がたくさんあることを知り、それらを大切に守っていく必要があることを学んだ。
- 海の歴史の深さ、スケール(海の雄大さ)を感じる事ができた。
- たくさんの人が海を守ろうと考えていることを学んだ。
- 海の生態系、そして、海の遺跡を守るために、汚染してはいけない。海の環境も守ることが大切であると思った。
- 海に興味を持った。水中考古学・(海の)歴史はおもしろそう。

## 2. 関連事業の内容

### ■特別講演会「プロカメラマンが魅せる水中遺跡」

【開催日時】平成29年7月17日（月） 14:00～15:00

【開催場所】九州国立博物館 ミュージアムホール

【参加者数】約120人

【目標・内容】

- 水中（海）を主なフィールドとするプロカメラマン、山本祐司氏のスライドショーを実施した。作品の紹介だけでなく、水中での写真撮影作業の様子、海底に眠る遺跡の歴史的背景などについて講演をしていただいた。また、水中撮影における苦労話、作業を行う際には安全対策を徹底して行うことの重要性、遺跡（文化遺産）を含めた海の環境を保全することが、海を生業とする者の責任であるということなどについて講演していただいた。
- 海に関わるクリエイティブな仕事があること、また、水中の写真を通して、海そのものや水中の文化遺産の大切さを知ってもらうことを目指した。



エントランスホールにおいて、イベントの広報を行った。特別展示のチラシ、図録、アンケートの配布を行った。海の中の臨場感を感じてもらうため、ミュージアムホールでは大型スクリーンを使用し、開演20分前にはすでに席が埋まり始めていた。





講師の山本氏が撮影した写真、およそ200枚のスライドショーを実施した。山本氏は、カメラマンとして多くの水中遺跡の調査に参加している。考古学の専門的な話ではなく、海の中での作業の様子や、海を大切に思う気持ちを率直に語った。



1時間の講演で様々な水中遺跡が紹介された。最後に、オーディエンスからの質疑応答の時間を設けた。潜水と考古学に興味を持ったきっかけ、水中での怖かった体験、海の中から遺跡を探す方法、人骨など有機物の保存状況についての質問があった。講演を通して、多くの人が海に興味を持ったものと思われる。

### 【来館者の声】

- 九州の身近な海に遺跡があったとは驚き。
- 水中考古学の観点から「海」の役割は重要。
- 漁師さんの情報が遺跡発見につながるの面白い。
- 今後も海底の調査をすすめてほしい。
- まだまだ未知のことがたくさんある。
- （水中の遺跡を）今のまま残してほしい。

## ■ やっぴい&ランディのサイエンスラボ「水中の宝をさがせ！！」

【開催日時】平成29年7月23日（日） 13:30～14:45

【開催場所】九州国立博物館 ミュージアムホール

【参加者数】約250名

【目標・内容】

- 九州国立博物館でシリーズとして開催している小学校低学年向けサイエンスショー「やっぴい博士のサイエンスラボ」とのコラボイベントとして開催した。やっぴい博士（当館職員）と、当事業担当者の佐々木が「ドクター・ランディ」として出演し、海の遺跡についてトークショーを行った。海の不思議について、また、スキューバ・ダイビングの装備などについて説明を行い、海の遺跡の調査風景のビデオを上映した。金属探知機を使用して金属を探す作業や、水中眼鏡を作るなど、身体を動かした体験も行った。プログラム終了後、子どもたちに潜水機材や金属探知機を実際に触ってもらう時間も設けた。
- 特に水中遺跡や歴史にこだわらずに、広く海の様子や環境等について興味を持ってもらうことを第一の目標とした。



子どもだけで100人以上が集まり、開演前にミュージアムホールがほぼ満席となった。小学生低学年の児童のため、最前列で見ることができるようマットを敷いた。スキューバの機材を装着してドクター・ランディが潜水機材について解説した。



トークショー中に、子どもたち数人にステージ上で金属探知機を操作させたり、水中眼鏡を使って水の中を覗いたりなど、体験を通して海に興味を持ってもらえるよう工夫した。「次やってみたい人！」の声と同時に子どもたちの手が上がる。



イベント終了後、海を身近に感じてもらえるよう、潜水機材や金属探知機などに実際に触れてもらった。スキューバの機材を背負って記念撮影する親子など、トークショーが終わってから子どもたちは海をフィールドに行われる研究や海の持つ魅力に興味を持ってステージに集まっていた。

### 【来館者の声】

- 海には沈没船や宝がいっぱいある！
- 奥が深くて面白い、たのしかった。
- 海は広い、深いところにもぐってみたい。
- 今年の夏は水中をのぞいてみたい。
- 海は広い、大きい。



## ■ 夏休み特別企画「鷹島海底遺跡よみがえる元寇船 VR 体験」

【開催日時】平成29年 8月25日（金） 9：30～20：00  
8月26日（土） 9：30～20：00  
8月27日（日） 9：30～17：00

【開催場所】九州国立博物館 エントランス

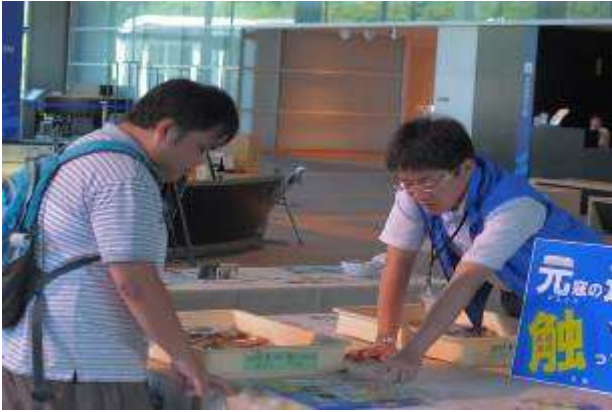
【参加者数】約3,000名

【目標・内容】

- 長崎県松浦市の鷹島海底遺跡の紹介ブースを博物館のエントランス中央に設置し、博物館を訪れた多くの方々にPR活動を行った。ブースの設置とお客様への対応は、主に長崎県松浦市の職員が行った。紹介ブースの目玉は、鷹島海底遺跡の「元寇船 VR 体験」であり、希望者はヘッドマウントディスプレイを装着し、海底遺跡の発掘状況を再現したVR画像を見たり、復元した船に乗ることが出来る。また、タブレット端末を使用した「元寇クイズ」などのゲーム、鷹島海底遺跡から出土した遺物を陳列した触れる展示、遺跡発掘時の写真展、遺物のペーパークラフトなど数々のアクティビティをお客様に体験していただいた。
- 様々なアクティビティを通して、蒙古襲来について知ってもらうことに心がけた。展示ケースで見るよりも遺跡を身近に感じてもらうため、ハンズオン（触れる展示・ペーパークラフトなど）など効果的な見せ方に工夫を凝らした。ブースを見に来たお客様に水中発掘の様子など生の声を聞いていただけるよう、水中遺跡を実際に現場で見た松浦市の職員を招き、お客様の質問などの対応をお願いした。VRでは、海に潜っている様子を再現しており、少しでも「海の中」の遺跡を調査する雰囲気味わってもらえるよう心がけた。これらの活動を通じて、海への関心を高めることと、水中遺跡を訪れた際の臨場感を伝えることを目指した。



九州国立博物館のエントランスホール中央にブースを設置し、多くの来館者の目を引くようバナーやポスターを配置した。VR体験は一人3分ほどとなるため、順番待ちのための椅子を置いた。待っている間も水中遺跡・元寇を知ってもらうためタブレットを渡してクイズやゲームなどを待ち時間の合間に楽しんでもらった。様々なアクティビティを通して、海の中の遺跡について考えてもらうきっかけとなった。



実際に水中で作業を行っている松浦市の職員を招き、遺跡の話や水中作業の様子を伝えるなど臨場感のある説明をしていただいた。VR体験は、特に子供に人気のコーナーで、コントローラーを離そうとしない子供もいた。中国の古代の船の様子、海の中の様子など初めて体験する子供が多かった。



エントランスホールの中央にブースを設置したため、どの方向から見ても楽しめるよう、パーティションの裏側には遺跡発掘の様子など写真を展示した。海から出た遺物に直接触れることができるコーナーは、VR体験の次に人気があった。海から引き揚げられた遺物を直接触ることにより、海を身近に感じてもらうことができた。

### 【来館者の声】

- もっと遺跡が見たい。
- 海には自然だけでなく歴史もあることも知った。
- 海をきれいにしようと思った。
- 海は、身近だけど遠い。もっと身近にしたい
- 鷹島海底遺跡の出土品に感動した。

## ■シンポジウム「水中文化遺産の多様性—縄文から龍馬まで—」

【開催日時】平成29年8月26日（土） 13:30～17:00

【開催場所】九州国立博物館 ミュージアムホール

【参加者数】約120名

【目標・内容】

●水中遺跡の多様性を伝えるため、講師3名を招聘し、それぞれ30分の講演をしていただいた。①「水中ロボットを利用した琵琶湖葛籠尾崎湖底遺跡の調査」（矢野健一氏：立命館大学文学部教授）、②「坂本龍馬のいろは丸調査」（吉崎伸氏：NPO 法人 水中考古学研究所理事）、③「水中文化遺産の保護 欧州編」（中西裕見子氏：大阪府教育庁文化財保護課総括主査）。

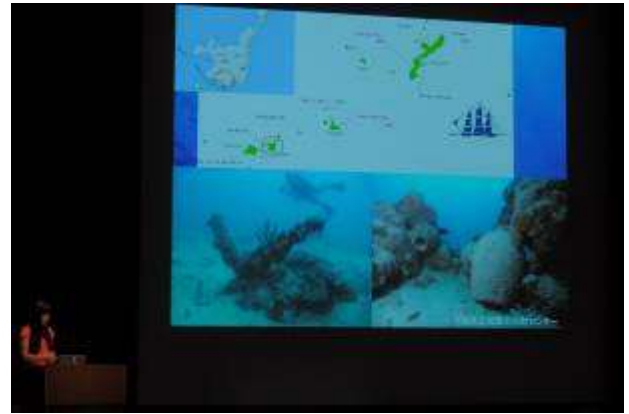
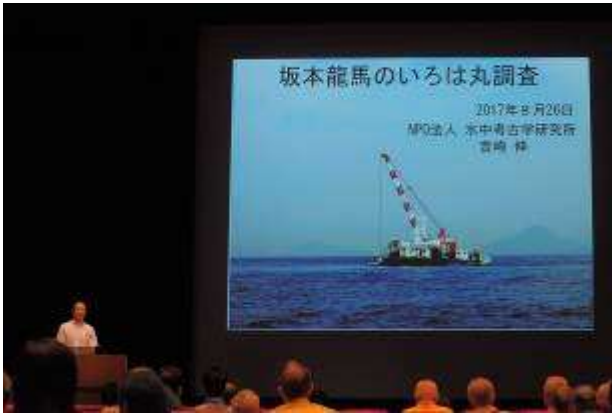
また、講演会後の討論会（パネルディスカッション）では、7名のパネリストに「水中遺跡の魅力にせまる」と題して、様々な意見を伺った。（矢野健一氏、吉崎伸氏、中西裕見子氏、福蘭美由紀氏（福岡市博物館）、木村淳氏（東海大学海洋学部）、森先一貴氏（文化庁記念物課）、また、九州国立博物館の佐々木蘭貞が討論のコーディネートをを行った。

●遺物の展示からだけでは、水中遺跡の発掘の様子や、研究の趣旨が伝わりにくい。そのため、実際に水中遺跡の調査に係わった研究者を招聘した。水中には様々な種類の遺跡があることを知ってもらうため、縄文遺跡の水中ロボットによる調査、沈没船の潜水調査、世界の水中遺跡の調査と活用の様子についてご講演いただいた。また、講演の後、パネリストによる討論会では、水中遺跡の魅力、日本における水中遺跡の調査・管理・活用と、今後進むべき道についてそれぞれお話をしていただいた。水中遺跡の紹介を通じて海に潜む未知や文化・経済の発展において海がいかに重要であったかについて多くの人に考えていただく機会を提供することを目指した。



九州国立博物館のミュージアムホールの前にブースを設置し、呼び込みを行った。配布資料として、講演の内容と共に特別展示の図録の配布も行った。ホールの入り口をあえて開けておき、お客様に自由に入出入りしていただく形式とした。講師の講演中には出入りが少なかったが、講演の合間には20～30名ほどの出入りがあった。写真は矢野健一氏の講演の様子。水中ロボットによる縄文遺跡の調査についての講演は珍しく、聞きに来られた方々は興味深く耳を傾けていた。





吉崎伸氏の講演では、坂本龍馬のいろは丸の調査について学んだ。透明度の悪い海では安全対策を徹底して調査を行うことなど、遺跡そのものだけでなく、海の調査に付いて知ることができた。続く中西裕見子氏の講演は、地中海や沖縄など綺麗な海にある遺跡の話をしていただいた。海底の遺跡を見に行くツアーなど 海外では行われている例があるが、日本ではまだ少ない。今後は、日本でも海底ミュージアムのような取り組みが増えていくことが期待されている。



3名の講演の後に、討論会が行われた。水中遺跡の魅力について、パネリストに語っていただいた。水中に興味を持ったきっかけや調査の苦労話など海の考古学ならではの話に盛り上がった。また、今後の日本の水中遺跡の保護と活用の方針に付いても議論を交わした。今後は、水中遺跡も海の観光資源として活用していくことが望ましいという議論などがあつた。

### 【来館者の声】

- 海についてこのような研究がされていることは新鮮だった。
- 水中遺産に関する情報を公開し、サポート体制を確立することがこの分野発展につながる。また、海にも文化遺産があり、活用することで町おこしとしての可能性も感じる。
- 日本の水中文化遺産の研究は、大陸各国に比べて十分とはいえない。
- 現在の海を守ることが大事。

## 【事業全体のまとめ】

当事業は、水中遺跡に焦点を当てた展示としては国立の機関で初めての試みである。水中遺跡は、一般市民になじみの薄い存在であり、その展示は国内に例が少なく参考となる他館の取り組みなどもあまりない。また、水中遺跡は、その特性により離島で発見されることが多く、通常の展示に比べると輸送費だけで多大な費用を要する。このように、挑戦的な企画でありながら通常の展示に比べ費用を要するため、当館で水中遺跡をメインテーマとして展示するにはリスクがあった。そのため、本サポートは、その成功に大きな役割を果たした。

本サポートの支援を受け、広報、作品の運搬、展示室の造作、成果品の印刷、付帯事業の運営等に活用することができた。広報（ポスター・チラシ）、展覧会図録、展示パネルなどを、デザイナーに作成を依頼したことにより、効果的な広報を展開できた。また、展示室の雰囲気も好評を得ることができた。上述した通り、本サポートなしに北海道から沖縄まで日本各地の水中遺跡から出土した作品を一堂に集めることは出来なかった。また、通常の展示では販売される図録を無料配布したことが SNS などで反響を呼び、開催期間後半でも多くの来館者が訪れていた。付帯事業に関しては、子供向けのサイエンスショー、学術的なシンポジウム、一般客を対象としたスライドショーや VR 体験などターゲットとなるオーディエンスを絞ったイベント4本を企画することができた。

四方を海で囲まれた日本の歴史において、海運、海を介した交流、海事文化は重要な役割を果たした。しかし、それらについての直接的な資料・物的証拠を見る機会は少ない。水中遺跡、特に沈没船は、船や海事文化に関する物的証拠を提供することができる数少ない資料である。このように貴重な水中遺跡についての展示が当館で実施できた意義は大きい。実際に過去の人が使ったモノを直接見る行為は、文献史料など2次的な証拠から学ぶ行為とは異なり、人々の感情に直接訴えかける力を持っている。来館者アンケートによると、展示物には直接「海や海事文化」に関する説明・解説などが少ない中、来館者はそれぞれ海について何かを感じ取っていたことが分かる。多くの人にとって水中から引き揚げられた品々を見たことは、おそらく当展示が初めてであると思われる。当事業を通して、「人間と海の関係」を感じとることができ、また、海を守ることはその中にある歴史も守ることと同一であることを知ってもらう機会を提供することができた。人と海が少しでも身近な関係となることに貢献できた。

## 3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 文化庁	遺跡・作品の選択、展示手法など一部指導・助言を受けながら実施した。
2. 長崎県松浦市文化財課	主に付帯事業で協力いただいた。

## 4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 長崎新聞	「海底遺跡の出土品を展示」 2017.7.21(金)

2. 朝日新聞	「水中考古学の今 一堂に」 2017.8.15(火)
3. 西日本新聞	「水中文化遺産の出土品ずらり」 2017.9.1(金)
4. RKB 毎日放送	「今日感テレビ」ニュース 2017.8.2(水)
5. NHK 福岡報道局	「はっけんTV」 2017.8.25(金)
6. 朝日新聞	「水中遺産研究が各地で加速」 2017.11.28(火)

以上